2021 秋　入学式　式辞

埼玉大学大学院に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。
本日大学院に入学されたのは修士課程 34 名、博士課程 34 名の皆さんで、このうち 65 名が留学生です。

ともに学問研究の道を歩む仲間として皆さんを本学大学院に迎えますことは、私たちの大きな喜びとするところです。教職員一同、皆さんを心から歓迎いたします。また、入学された皆さんをこれまで支えてこられたご家族の皆様、関係者の皆様にも心からお祝いを申し上げます。

昨年来、私たちは未曾有の感染症パンデミックを経験してきました。過去に例を見ない速さでワクチンが開発され、多くの方が接種を受けられていますが、新たな変異株の出現により、いまだ収束の道筋は見えていません。この 2 年近く、私たちの生活は多岐に渡って深刻な影響を受けて来ました。大学ではキャンパスでの活動が制限され、対面での活動や友人・仲間たちとの交流の機会が失われた中、皆さんは焦りや孤独感にさいなまれた日々もあったのではないでしょうか。そのような困難な状況にあっても、学問の道をたゆまず歩み、本日、大学院に入学された皆さんの努力を心より讃えたいと思います。

さて、今日は、これから専門的な学問研究の世界に進もうとする皆さんに、お祝いの言葉として 3 つのアドバイスを送りたいと思います。

一つ目は、自らのアイデアを他の人と分かち合い、積極的に議論する重要性です。
学問研究を進め深めるためには、アイデアや疑問を自由に議論する場を持つことが必要です。当然、指導教員とは学問や研究について突き詰めた議論をされると思いますが、同時に、気楽にディスカッションできる研究仲間を持つことを強く勧めます。視点が異なる人と話すことで自分の考えがまとまったり、検討不足のところに気づかされたりします。また、様々な話をしているうちに、自らの研究に新たな切り口を見出すこと、あるいは全く新しいアイデアを思いつくのはよくあることです。人と人のアイデアの相互作用は研究を進める上で不可欠です。その意味で、学会やシンポジウムは議論を深める重要な場となります。はじめのうちは、多くの参加者がいる中で質問することは躊躇われるかもしれませんが、勇気を持って質問することを繰り返すうちに、心理的バリアが低くなってきます。以前、私は研究の先輩から、「ダメな答えというのはあるが、ダメな質問というのは無い」と教えられました。さらに、自分の研究を積極的に発表してください。学会会場で厳しい質問を受けることも、自分の研究力やコミュニケーション力を上げるために必要なことです。

皆さんにお伝えしたいアドバイス二つ目は、否定的な研究態度についてです。先頃亡くなられたノーベル賞受賞者益川敏英先生は、iPS 細胞の研究で知られる山中伸弥先生との対談の中で、「証明したい理論を徹底的に疑い、考えつく限りの可能性を考えて、ひとつずつ検討してく作業を『肯定のための否定の作業』と呼び、執拗なまでの検討を加えた結果、どうしても認めざるを得ないものだけが残されていく」と述べられています。この否定的な研究態度は、自分の考えの客観性や妥当性を上げるために必須であり、このことによって初めて真理に近づくことができます。自分自身の研究によって自らを否定することもあれば、指導教員や仲間との議論によって否定されることもあるでしょう。益川先生は、共同受賞者となった小林誠先生との「CP 対称性の破れ」の研究について、「僕がまず強引に理論式を作る。それを小林君がこれではダメですとかいってやり直した」とおっしゃっておられます。

自分自身の考えや研究結果を疑い、否定することは、それまでの努力を水泡に帰す作業を自らに課すことにもなり、極めて厳しい試みです。しかし、このような妥協しない検証があって初めて、ユニークで説得性のある結果が得られます。学問研究のためには、この厳しさに立ち向かう覚悟を持たなければなりません。

三つ目のアドバイスは、失敗にめげない強い気持ちを持つことです。私は、生物学・基礎医学の領域において、ホルモンの分泌機構と、体、特に消化管の生理機能に対する作用メカニズムを研究対象としています。研究では、分子生物学、細胞生理学、解剖生理学の手法を用いて、これまでの知見から得られている情報や自分の考えを元にして仮説を立てて検証する実験や、生体で起きている生理現象を見つけて、その機構の解明を行ってきました。振り返ると、多くの実験は思うように進まず、失敗の連続でした。果たして、この考えで良いのだろうかと疑心暗鬼に駆られることが何度もありました。一方で、思った通りの結果が出たり、思わぬ展開で問題が解けたりする大きな喜びを感じることもありました。自然科学にとどまらず、どのような研究領域であっても、研究者は自らが発見した事柄について、他の研究者や社会に納得してもらえるような証拠を示さなければなりません。最先端の研究になればなるほど、未開の荒野を手探りで進むことになります。研究において、失敗や挫折は不可避です。失敗しても、めげずに、工夫を凝らして、希望を持って何度でもチャレンジしてください。このような葛藤を乗り越えた先に皆さん自身の学問が作られます。

埼玉大学は、国立大学では珍しく全ての学部、大学院がひとつにまとまっているキャンパスを持ちます。この環境は、多様なバックグラウンドを持つ学生、教員と交わり、学びあうことを実現します。また、地方と首都東京との結節点という本学の地の利は、多様で豊富なリソースの活用を可能にします。これらを存分に活かす貪欲さを持ち、大学、そして自分の専門領域に閉じこもることなく、広い視野を持って学び、様々な領域の人々とも積極的に関わり、自らの考え・研究成果を発信し、協働していくたくましさを持ってください。そうすることによって皆さんがこれから修める学問、研究の間口を広げ、その成果を社会課題の解

決に結びつけていくことが可能となります。

皆さんが大学院においてそれぞれの専門を究めていく過程は時に険しく、時に曲がりくねった道かもしれません。しかし、自らの志を忘れることなく、情熱をもって進む限り、道は拓けます。そこには、皆さんよりも先に学問研究の道を歩み続けてきた教員がいます。どうぞ、研究や生活で困ったことがあったら何でも相談してください。私たち教職員一同は、皆さんを全力で支えて参ります。

本日はご入学誠におめでとうございます。

令和 3 年 9 月 24 日
埼玉大学長　坂井　貴文